

編者まえがき

小泉仰先生は、今日（一九九七年二月十四日）古稀の誕生日をお迎えになり、規定に従って本年三月国際基督教大学をご退任になる。第一部の「年譜」に見られるように、先生は、慶應義塾大学文学部と大学院で哲学や倫理学を勉強され、さらにアメリカ留学（ミシガン大学）で研鑽をお積みになった後、長年にわたって母校で教鞭をおとりになされた。同時に日本近代思想史、比較思想史、教育哲学など幅広い分野にわたる研究活動は、学界に大きな貢献を残しつつ今日にいたっている。本学 I C U には、一九九一年四月、長（武田）清子先生の後任として、社会科学科（歴史専攻）および大学院比較文化研究科の教授に就任され、以後六年間（その前に非常勤講師として教えて下さった時期を含めると 8 年余り）日本近代思想史を中心に学生たちを指導して下さった。アジア文化研究所にも加わって下さってご協力をいただいている。

編者まえがき
先生はご家庭の環境もあつて若き日からの真摯なキリスト者であつたが、同時に篤学の信徒でもあり、長年長老を勤めていらつしやる中渋谷教会ではギリシャ語新約聖書の購読とヘブル語旧約聖書の購読を指導されていると聞く。ご執筆いただいた「私の学問遍歴」や詳細な「年譜」「業績一覧」からもうかがえるように、大変几帳面な方である

と同時に温厚篤実なお人柄であり、後輩の私どもにたいして良い学問的刺戟を与えて下さるとともに、学生たちの指導を含む毎日の生き方のうえで大きなかつ温かい示唆を与えて下さる先達であつた。

小泉仰教授の学問的業績は、「業績一覧」を瞥見しただけでも分かるように、広く人間の思想・倫理・道徳から教育・研究の方法論までも含んでいる。その特徴を要約すると、第一に研究関心の広さであり、一番のご専門の倫理学に限られず、哲学、道徳から教育、宗教学、さらに社会心理学にまでおよんでいる。先生はイギリス思想史と日本思想史の専門家であり、本学では日本近代史と近代日本思想史を担当されたが、イギリス哲学、とくにジョン・スチュアート・ミルの研究でも知られている。と同時に先に言及した聖書研究その他では、ギリシャ語やヘブライ語だけでなく、シリア語やアラム語の言語学的分析にまで造詣が深い。第二の、そして最も重要な点は、比較文化的アプローチである。先生は「近代」のテーマにも「前近代」のテーマにも、また、アジア（とくに日本）に関する研究にも西洋に関する研究にも精通されたうえで、とくにイギリス風の「自由」思想の日本への受容に終始関心を持ち続けていらつしやる。学位論文となる『西周と欧米思

想の出会い』(一九八九刊)は長年の西周研究(先生は一九六五年から十数年の間に五指に余る論文を発表されている)を踏まえた大作である。先生はまた、福沢諭吉や中村敬宇がどのようにして西洋思想をとり入れていったかにも注目し続けてこられた(福沢諭吉や中村敬宇に関する著書、論稿、講演は二十点を越える)。西欧の思想や価値観がどのようにして日本にもたらされ、日本固有の思想に接木され、日本の近代化の過程のなかで新しいタイプの思想ないし価値観となつて展開してきたのか、が先生の一貫した中心テーマであつたのであり、私たち日本人の多くがこの百年にわたる近代化の歩みのなかで意識し、あるいは無意識のうちに気にかけてきた大問題であつた。先生は、いわば、この大問題にたいして真正面から立ち向つた有数の専門的研究者たちの一人と言つてよいと思う。近く予定されているICUにおける最終講義「ジョン・スチュアート・ミルと近代日本」は、先生の学問的成果を総括するものとなるであろう。さらにこの最終講義を終章とするご著書『J・S・ミル』(研究社)の準備が進んでおり、近いうちに公刊される予定と承つている。

第三に倫理と道德の問題、例えば教育と道德の関係、科学と道德の関係、法体系と倫理の関係などへの強い関心にも触れておかなければならない。西洋と日本の近代的発展にかかわる研究のなかで、先生のご関心は、一貫して個人の、とりわけでもその心の問題にかかわる変化に向けられてきた。真摯なキリスト者としての先生の日々の生きかたと無関係ではなかつたに違いない。

加えて第四に、小泉教授がICU社会科学科のファカルティーとして、社会科学の方法論、先生の場合はとくに社会心理学の方法論を思想的探究に結びつけようと試みてこられたことにも注目しておきたい。このような該博な学際的アプローチの実践は、私たち後輩にとつて良き刺戟であり、知的冒険への勇気を与えるものであつた。

私どもは、長い間ではなかつたけれども過ぐる六年の歳月、先生に直接接することを通して与えられた学恩に感謝しつつ先生の古稀を祝うこの論集を企画させていただいた。執筆者は、直接間接に先生から学問的・思想的刺戟を与えられた本学における先生の同僚後輩であり、先生の学問的関心と交友の広さを反映して、さまざまな学問領域にわたつてゐる。上述した、小泉教授のご研究の内容と本アジア文化研究所の長年の研究関心を勘案して共通テーマを「近代化の思想的系譜」とさせていただいた。テーマに即してなんらかの結論をめざす纏まつた専門の論文集というわけにはゆかないが、集まつた論稿(先生ご自身のものを含めて論説十三篇、研究ノート一篇——第二部に収録)はいずれも近代化の問題に直接・間接にかかわるものである。ささやかではあるが、私どもの感謝の気持の一端として、先生の一層のご健勝とご活動をお祈りしつつ本書を献げたい。

なお、小泉先生には、本書のテーマにかかわる論稿を頂戴しただけでなく、先生の歩んでこられた学問の道を改めてうかがいたいという気持から、とくにお願ひして「私の学問遍歴」という一文を書いていただき第一部の冒頭に載せさせていただいた。先生ご自身はご自分を

評して学問のドン・キホーテであると言っている。私どもは、それこそ、個と普遍、日本と西洋、近代と伝統の双方にわたって真摯なかつ絶えざる関心を持ち続けていらつしやる先生の学問の広さの現われと考へ畏敬の念にうたれる思いである。ご多忙なかを私たちの企画に应えて快くご執筆下さった先生に心から感謝申し上げます。

また本書の編纂にあたってはアジア文化研究所の高崎恵、宮沢恵理子、徳田彩子、鬼塚博諸氏の尽力を得たこと、また研究社印刷の永野新勇氏には印刷製本についてお骨折を願ったことを記して謝意を表明させていたいただきたいと思う。

一九九七年二月十四日

魚住昌良

M・ウイリアム・スタイル